姫路市埋蔵文化財センター調査報告　第100集

姫路城城下町跡

―姫路城跡第422次発掘調査報告書―

2020

姫路市教育委員会

序

姫路城は本市の象徴であるとともに、我が国を代表する文化遺産の一つです。江戸時代初期に池田輝政によって五重六階、地下一階の大天守をもつ城郭が整備され、その後400年間歴史を刻み続けています。

大天守が聳える姫山の麓に広がる城下町は、三重の堀によって、藩の中枢が置かれた内曲輪、武家屋敷が建ち並んだ中曲輪、町人地・寺社地・武家屋敷地などで構成される外曲輪に区画されています。現在、内曲輪・中曲輪の大半は世界遺産及び国の特別史跡として保護・顕彰が図られ、外曲輪では姫路市の中心市街地として中核市に相応しい街づくりがおこなわれています。

今回報告する姫路城跡第422次調査は、西国街道と中堀に面する町人地であった元塩町79で実施しました。近世の町屋に伴う遺構のほか、下層からは古代と中世の遺構も確認されました。

ここにその成果を報告し、姫路城城下町跡の調査研究の進展に資する所存であります。

最後に、事業実施にあたり、多大なご協力を賜りました株式会社ラウレア、その他関係各位に心から御礼申し上げます。

姫路市教育委員会

教育長　松田　克彦

例　言

1. 本書は兵庫県姫路市元塩町 79 で実施した姫路城跡第 422 次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は株式会社ラウレアによる共同住宅の建設に先立って実施した。
3. 発掘調査及び出土品整理作業等は、株式会社ラウレアと姫路市の間で委託契約を締結して実施し、その経費は株式会社ラウレアが負担した。
4. 発掘調査は 220 ㎡を対象とし、令和元年（2019 年）6 月 5 日から 8 月 20 日の期間で実施した。
5. 発掘調査報告書の編集は、姫路市埋蔵文化財センターが行った。
6. 発掘調査開始から報告書刊行までの体制は以下の通りである。

姫路市教育委員会
　教 育 長　　松田　克彦
　教育次長　　坂田　基秀
生涯学習部
　部　　長　　沖塩　宏明
文化財課
　課　　長　　花幡　和宏
　課長補佐　　大谷　輝彦
　技術主任　　関　　梓

埋蔵文化財センター
　館　　長　　前田　光則
　課長補佐　　岡﨑　政俊
　係　　長　　森　　恒裕
　技　　師　　黒田　祐介［現地調査・整理担当］

7. 調査区平面図は世界測地系を使用し、方位はすべて座標北である。また、標高は東京湾平均海水準(T.P.)を基準とした。
8. 土層注記の色調は『新版標準土色帳』（1999 年度版）に準拠している。
9. 遺構番号は、各種の遺構を通じて一連の番号を与えた。また、その番号の前に「1 ー」「2 ー」と表示することで、第 1 面と第 2 面の遺構を区別している。なお、本書では遺構通し番号の前に遺構種別を差し込んで報告する。
10. 出土遺物、図面、写真等は、姫路市埋蔵文化財センターで保管している。なお、これらの記録は各種の遺構を通じて与えた一連の遺構番号で管理している。
11. 発掘調査及び出土品整理作業、発掘調査報告書の作成にあたっては、以下の方々のご支援、ご協力を賜った。

株式会社ラウレア　　元塩町自治会

目　次

第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過
　第 1 節　調査に至る経緯と経過 …… 1
　第 2 節　調査地の位置と既往の調査・研究 …… 1

第Ⅱ章　調査の成果
　第 1 節　基本層序 …… 2
　第 2 節　本発掘調査の成果 …… 2

第Ⅲ章　総括 …… 6

第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過

第1節　調査に至る経緯と経過

兵庫県姫路市元塩町79において、株式会社ラウレアによる共同住宅の建設が計画された。計画地は周知の埋蔵文化財包蔵地である姫路城城下町跡（県遺跡番号020169、近世、集落跡）に該当しているため、文化財保護法第93条第1項に基づき平成31年（2019年）2月12日に姫路市教育長宛に届出がなされた。これを受けて姫路市教育委員会　生涯学習部　文化財課が工事内容の精査、事業者との調整を行い、工事に先立ち事業地内の埋蔵文化財の保存状況等を確認するために確認調査を実施することになった。

3月12・13日に確認調査（遺跡調査番号20180488、姫路城跡第414次調査、一部を国・県補助事業として実施）を行い、事業地内に埋蔵文化財が良好に残っていることを確認した。これを受けて、3月20日に結果報告と本発掘調査を要する旨の指示・勧告（30教文発第495号）を行い、工事により埋蔵文化財が破壊される範囲を対象に本発掘調査を実施することになった。

文化財課で調査条件等の調整を行った後、姫路市教育委員会　生涯学習部　埋蔵文化財センターを主管課として、4月26日付で株式会社ラウレアと姫路市との間で「姫路市元塩町79に存する埋蔵文化財（姫路城城下町跡）発掘調査委託契約」を締結し、本発掘調査（遺跡調査番号20190102、姫路城跡第422次調査）に着手した。調査は事業者から提供を受けた機械、作業員により実施し、期間は令和元年（2019年）6月5日から8月20日であった。7月6日には地元住民を対象に現地説明会を開催し、40人の参加を得た。

現地調査終了後、姫路市埋蔵文化財センターにおいて出土品整理作業を開始し、令和2年（2020年）3月31日の本書刊行をもって、事業を終了した。

第2節　調査地の位置と既往の調査・研究

姫路城は、池田輝政により慶長6年（1601年）から9年の歳月をかけて築かれた平山城である。大天守が築かれた姫山を中心に内堀、中堀、外堀の三重の堀がめぐらされ、武家屋敷や町屋等を囲い込む惣構の縄張が採られている。今回調査を実施した元塩町79は大天守から南南東約900mの外曲輪に位置しており、絵図によると南の西国街道、北の中堀に挟まれた町屋であったことが読み取れる。近世における住人の名や間口の広さは、地子銀帳等の史料が残されていないため知ることはできない。

近世姫路城城下町における調査地近辺の地割りは、調査地から北東250mにある播磨国総社に因んで「総社ライン」と呼称され、その特徴はN－5°－Eという正方位に近い点にある（堀田1988）。この播磨国総社を中心とした直径約400mの範囲は本町遺跡（県遺跡番号020465、奈良時代、官衙跡）に指定されており、播磨国総社の北西隣地（姫路郵便局敷地内）で実施した発掘調査では、大量の瓦の出土に加え方形掘方を持つ掘立柱建物が見つかり、8世紀後半には遺構の主軸が真北を指すようになることが明らかになった（姫路市教育委員会1984、山本ほか2010）。古くから歴史地理学者によって姫山の東麓一帯を播磨国府に比定する考察がなされてきたが、発掘調査によって明らかになった建物の特徴や瓦葺建物の存在、遺構の変遷のあり方などから当地が地方官衙遺跡、特に播磨国衙跡である可能性が考古学的にも提示されるに至った（山中1984）。先述の調査地周辺の地割りはその名残と考えられている。また、総社ラインに該当するエリアには「元塩町」「古二階町」といった町名がみられるが、これらは城下町建造の前時代からの町の存在を物語り、それを大きく改変することなく城下町に組み込まれたと評価する意見がある（堀田1988）。

また、中堀については確認調査の際に調査地北端に設定した調査区でも検出できておらず、北隣地にあ

ることがほぼ確実となった。地元住民からの聞き取りによれば、戦前に調査地北隣（NHK姫路放送会館敷地）に姫路警察署が建設される際に北側20坪ほどの土地を譲ったとのことである。

第Ⅱ章　調査の成果

第1節　基本層序

現地表は標高13.0mである。調査区南壁をみると現地表から現代の盛土約10～20㎝、近世から近代の整地層約60㎝を経て、標高約12.2mで地山に至る。外曲輪での調査でよくみられる太平洋戦争時の戦災焼土層は確認されなかった。地元住民からの聞き取りによれば、北隣地にあった警察署への延焼を避けるために、近隣の建物が空襲前に取り壊されたことが原因とのことである。

また、城下町建造以前の耕土とされる灰白色粘質土層がなく、多数の柱穴が検出されたことから当地が城下町建造以前に存在した集落に該当していることが明らかになった。

第2節　本発掘調査の成果

調査では近世、中世、古代の遺構を確認した。第1面は近世整地層最下層にあたる標高約12.3m付近、第2面は地山上面を検出面として調査を行ったが、本書では近世の遺構を第1面、中世・古代の遺構を第2面として報告する。

1. 第1面の遺構・遺物（近世）

今回確認した遺構は、礎石、列石、土坑、井戸、塼列建物等多岐にわたる。整地層と遺構埋土の識別が困難だったものもあり、第2面で調査した遺構でも近世と判断できたものは第1面の遺構として報告する。また、遺物に恵まれず、時期の特定ができないものが少なくない。そのため、ここでは主要遺構及び時期の特定が可能な遺構を報告する。

遺構の配置　全体的な傾向は以下の3点に整理できる。①調査区南半には土坑等の地面を掘り下げるタイプの遺構が少なく、礎石が確認される、②調査区中央には井戸があり、③調査区北半には土坑が多数認められる。これらを既往の調査の成果と照合すると、間口側に建物が建ち、裏手に廃棄土坑を伴う庭が広がり、その間には井戸などの水回りの施設が配置されるという、姫路城城下町の町屋として一般的な構造を持つことが指摘できる。

西国街道　調査地南側の道路（旧西国街道）際は一部を除いて調査対象外であったため、街路は確認できていない。道路際まで調査できた箇所では高さ40㎝、厚さ20㎝の漆喰が道路沿いに延びていた。時期や近世西国街道との関係は不明だが、調査地から東220m地点で実施した第375次調査では石組みの街路側溝が確認されている（姫路市教育委員会2018）。

町屋建物と整地層　礎石には欠失したものも多く、建物の間取りなどを明らかにできるほどの情報は得られていない。礎石上面の標高は大きく12.3～12.4m／12.5～12.6m／12.7～12.8mに分けられ、建て替えが繰り返されたことがわかる。整地層は厚さ約60㎝が確認され、標高12.4m前後の同一層中から土師器皿等（図4－1～6）が出土した。特に土師器皿2・3・4はまとまって出土しており、整地の際に何らかの行為が行われた可能性が高い。3は正位、2・4は逆位で出土した。

土師器皿のうち、1は手づくね、2・3・4は底部糸切りで、いずれも口縁に煤が付着しており灯明皿として使用されたことがわかる。5の備前焼壺には、重ね焼きの痕跡があり、上半には自然釉が付着せず、火襷

及び巻き付けた藁の痕跡が認められる。6の焙烙は平行タタキが施されるタイプ（中川A2類）である。これらの年代は概ね17世紀前半に収まると考えられる。また、そこから約6m北では、標高12.41mで犬形土製品（7）が出土した。

竈　調査区東壁際で検出した。残存状況は悪いが標高12.7mと12.4mの少なくとも2面分を確認しており、整地のたびにほぼ同一箇所で作り直されたことがわかる。焚口は西向きに開口し、燃焼部には石組基底石が残るものや瓦が敷かれているものがあった。

敷地境　調査区東壁際では列石及び礎石が確認され、検出状況から近世から近代にかけて複数回の改修が行われたことが判明した。列石等をまたぐ近世の遺構がないことも考慮し、これを敷地境とした。西壁側については敷地境の可能性を有する遺構は認められないが、後述する塼列建物が西隣地まで及んでいることから、現在の土地境界は近世の敷地境を踏襲していない可能性が高い。

塼列建物と塼　南北4.6m、東西3.0m以上の規模で、さらに西に延びる。塼は1段分を確認しており、天端の標高は南辺12.55m、東辺は南半で12.55m、途中から一段下がって北半では12.3mとなる。北辺は12.25mである。塼の据付は幅の細い掘方を伴う。塼で囲まれた空間内には礎石が4基並び、心々間距離は80㎝、天端の標高は12.45mである。

塼の高低差がなぜ生じたのかは明確ではない。ただ、東辺南半の塼は下部の2－溝65埋土に含まれる礫上に据わっていたことから、労力をかけてまでこの礫を除去して高さを揃える必要がなかったことが理由として考えられるのではないだろうか。

塼列建物の床面の大部分を構成する土層（図5－4層）はシルト質の地山を用いた盛土で、塼列で囲まれた範囲の周囲まで広がっていた。地業を省略する代わりに、この土を意図的に選択して面を整えた可能性もある。

塼は35点を取り上げた。いずれも一辺25㎝の正方形で、厚さ2㎝の同一規格によるものである。

遺構の時期としては、近世初頭とみられる整地層を切り込むことから近世の遺構として評価したが、塼以外の遺物がないことに加え、遺構の切り合いもないため正確な年代は明らかではない。姫路城城下町においてこの類の建物がいつまで建築されるかの検討は類例の増加を待たざるを得ないが、今回の例に限れば層位関係から少なくとも近世前半に収まると推測している。また、姫路城跡第338次調査で確認した塼列建物は、1620年代から30年代の一括資料が出土した遺構の上部に構築されており、年代の手掛かりとすることができる（姫路市教育委員会2017）。

土坑　1－土坑01は、1－土坑56を切る遺構である。長軸2.7m、短軸2mの楕円形を呈し、深さは1mを測る。遺物は染付磁器碗・蓋（主に大橋Ⅴ期）、京・信楽系施釉陶器碗、関西系焼締陶器擂鉢（白神Ⅰ型式）、焙烙（中川H類）、柿釉灯明具等がある。染付磁器蓋には1点のみコンニャク印判による施文がみられ、碗には広東碗が含まれる。概ね18世紀末から19世紀前葉頃の年代を与えることができる。

1－土坑15は、長軸1.8m以上、短軸1.5mの楕円形を呈し、深さは90㎝を測る。遺物は染付磁器碗・蓋・皿（主に大橋Ⅴ期）、青磁香炉、京・信楽系施釉陶器土瓶、瀬戸美濃焼水甕、関西系焼締陶器擂鉢（白神Ⅱ型式）、焙烙（中川E3類・瀬戸内系）等がある。概ね19世紀前葉頃の年代を与えることができる。

1－土坑54は、長軸2m、短軸1.6mの楕円形を呈し、深さ1mを測る。遺物は染付磁器碗（大橋Ⅳ期）、京焼風施釉陶器碗（高台内に刻印「森」）、焙烙（中川E2類・E3類か）、土師器皿（いずれも糸切り底）等がある。染付磁器碗のうち、外面に五三桐文が散らされた1点はコンニャク印判による。また、草花文が描かれたものの1点には、コンニャク印判と手描きの併用が認められる。これらには概ね18世紀前半頃の年代を与え

ることができる。

1－土坑56は、1－土坑01に切られる遺構で、長軸2.8m、短軸1.6mの楕円形を呈し、深さは90cmを測る。遺物は、肥前系陶器碗・皿、志野向付、備前焼徳利、土師器皿（底部糸切り）、焙烙（中川A2類）、丸瓦（コビキA）等がある。肥前系陶器皿のうち1点は見込みに砂目が残る。これらの年代は17世紀前半に収まると考えられる。

柱穴　2－柱穴16は直径1.2mの円形の掘方を持ち、深さは1.3mを測る。柱は抜き取られていたがその直径は30cm程とみられ、抜取跡には瓦が投棄されていた。底には50cm大の角礫を用いた礎盤石が確認され、その周囲には10cm大の円礫が敷き詰められるなど、大きな荷重がかかることを前提とした構造である。対応する他の柱穴もなく、用途等は不明である。年代を特定しうる遺物は出土しなかったが、層位関係から近世後半以降のものと考えられる。

井戸　井戸は2基確認した。うち1基はコンクリート管埋設による近代のものであった。他方、1－井戸64は石組が残されておらず、遺物が出土しなかったため年代も不明である。工事の影響を受ける標高11.5mまでを調査し、それ以下は現地保存した。

2. 第2面の遺構・遺物（中世）

遺構は、埋甕遺構、列石、柱穴、柱穴列、溝があり、埋土の色調が灰白色系を呈するという共通点をもつ。先述の通り、第2面は地山上面を検出面とした。地山上面で初めて検出できる（近世整地層に被覆される）遺構は第2面に帰属するものとしたが、遺物に恵まれず、時期の特定が困難なものが少なくない。ここでは主要遺構及び時期の特定が可能な遺構を報告する。

埋甕遺構　塼列建物に切られ、2－溝65を切る遺構である。掘方は南北7m、東西3.3m以上の隅丸方形を呈す。掘方内に26基の円形土坑が並ぶことから、埋甕遺構として評価した。なお、甕は全て抜き取られていた。底面は凹凸があるが、検出面からの深さは約50cmである。掘方埋土除去後、7基の礎石を確認した。うち1基は上面検出時に確認していた直径約20cmの柱穴の位置と合致するため、甕を埋設する過程で礎石と柱材下部は埋められたと考えられる。中央東寄りに他の埋甕据付穴より大型の落ち込みがあり、礫が集積していたが他の埋甕との関係性は明らかではない。また、掘方東辺に沿って南北に並ぶ柱穴を3基確認した（2－柱穴列464）。その位置関係から埋甕遺構に関連した施設と推測される。

埋甕遺構掘方から出土した遺物はごく少量で、白磁皿（図7－12）、備前焼擂鉢（13、乗岡中世6期か）、土師器堝（14・15、長谷川羽釜形タイプ・播磨型Ⅶ期）がある。これらには概ね16世紀前葉から中葉の年代を与えることができる。出土遺物が極めて少ないことに加え、下部の2－溝65出土遺物と内容が同じであることから、もともとは溝65に帰属した遺物が本遺構の埋土に巻き込まれた可能性が高い。そのため年代を断定するのは困難だが、2－溝65埋没後に埋土直上に造られている点から、ひとまず16世紀後葉頃の遺構としておきたい。

列石　2－列石90は、1－土坑1・15に切られる遺構である。直径約60cmの円形の掘方に40～50cm大の円礫が据えられており、4基が並ぶ。欠失したものもあるが、心々間距離は1mである。どのような施設に伴うものかは不明である。遺物がなく詳細な時期は不明であるが、近世整地層下に存在していることから、中世の遺構とした。

柱穴　2－柱穴18は直径1.4m、やや不整形の円形掘方を持つ大型の柱穴で、深さは90mを測る。根固めとして大型の角礫・円礫が認められ、底には直径25cmの柱材が残存していた。掘方埋土からは、瀬戸美濃焼碗

（図6－10）と備前焼徳利（11）が出土した。年代は断言できないが、16世紀末頃のものとしておきたい。性格は不明である。

溝　2－溝65は埋甕遺構に切られ、2－溝76を切る遺構である。幅5m、深さ1.6mを測る。断面を見ると、落ち込みは3段階で、それぞれに平坦面をもつ。最下部は幅80㎝、深さ60㎝の急角度の落ち込みで、底面の標高は西壁際で10.6m、東壁際で11.0mと東に向かって浅くなる。最下部については工事掘削深度との関係から部分的な調査に留めた。

出土遺物には、瀬戸美濃焼碗（図8－16）、備前焼擂鉢（17～21、17:乗岡中世3a期、18･19:中世6期）、土師器堝（22～24、22：長谷川鍋形タイプ鉄鍋形Ⅴ期、23：鍋形タイプ鉄鍋形Ⅵ期、24：羽釜形タイプ播磨型Ⅵ期）がある。その他、土師器堝には埋甕遺構出土のもの（図7－14）と同タイプも含まれ、概ね16世紀前葉から中葉の年代を示している。その他、布目瓦が出土した。

2－溝68は、2－溝72を切る遺構である。幅1.4m、深さ80㎝を測る。断面は漏斗形を呈し、下半は垂直に落ち込む。遺物は少ないが、白磁皿（図9－25）、土師器皿（26）、瓦質土器羽釜（27）、土師器堝（28）、単弁八葉蓮華文軒丸瓦（29）がある。

2－溝72は、2－溝68に切られる遺構で、幅70m、深さ25㎝を測る。遺物は少なく時期は明確ではないが、埋土が2－溝68と似ており、時期差は少ないものと考えられる。

柱穴列　柱穴は、近世の遺構が少ない南半を中心に検出した。密集しているために、建物として把握できたものはなく、柱穴列5条を把握できたにすぎない。いずれも遺物の出土はなく、詳細な年代は不明である。ただし、埋土の色調等から推測すると、中世の中でも城下町建造に比較的近い時期のものが主体であろう。

2－柱穴列459は、主軸はN-5°-Eを採り、柱穴8基が並ぶ。心々間距離は約80㎝である。2－柱穴列460は、主軸はN-7°-Eを採り、柱穴4基が並ぶ。心々間距離は約1.8mである。2－柱穴列461は、主軸はW-5°-Nを採り、柱穴3基が並ぶ。心々間距離は約2.4mである。2－柱穴列462は、主軸はN-8°-Eを採り、柱穴5基が並ぶ。心々間距離は約1.8mである。2－柱穴列463は、2－溝65を切る遺構である。主軸はほぼ南北正方位を採り、柱穴5基が並ぶ。心々間距離は約2.2mである。2－列石90に近接して並行しており、関係性を伺わせる。

いずれもその主軸は、当地の地割り「総社ライン」と整合している。

3. 第2面の遺構・遺物（古代）

遺構は溝2条のみで、埋土が黒色系を呈するという共通点をもつ。

溝　2－溝66は幅1.3m、深さ50㎝を測る。主軸はほぼ東西正方位を採る。遺物は土師器甕（図9－30～33）がある。土師器甕の調整は、外面ハケ目、内面下半はユビオサエによる凹凸が顕著で、上半はナデより平滑に仕上げられる。2－溝72は幅80㎝、深さ20～45㎝を測る。検出した延長が短いため精度には欠けるが、主軸はW-20°-Nと条里地割とほぼ合致する可能性がある。遺物は底部ヘラ切りの須恵器碗（34）がある。

瓦　丸瓦・平瓦は、2－溝65から比較的まとまった量が出土した。ただし、いずれも破片であり、端部の摩滅具合から原位置からは大きく移動していると考えられる。また、軒丸瓦は近世整地層及び2－溝68から出土した（図4－8、図9－29）。8は重圏文軒丸瓦、29は単弁八葉蓮華文軒丸瓦である。これらは、今里幾次氏によって「本町式」軒丸瓦、「毘沙門式」軒丸瓦と名付けられ、前者は8世紀後葉、後者は9世紀前葉の年代が与えられている。いずれも今里氏が提唱する「播磨国府系瓦」で、その生産・流通は播磨国司の管理統制下に置かれていたとされる（今里1978・1995）。

第Ⅲ章　総括

今回の調査では、古代から近世にかけての遺構を多数確認することができた。近世の遺構から復元される町屋は、街路沿いに建物があり、裏庭に廃棄土坑、その間に井戸が配置されるというこれまで姫路城城下町跡で確認された標準的な構造を採るものであった。また、姫路城城下町跡で類例を増しつつある塼列建物は、明確な年代が押さえられなかったものの、近世整地層との関係性や構築方法について新しい知見を得ることができた。

また、中世に関しては城下町建造直前の耕土が確認されなかったことに加え、多数の柱穴等が確認できた。柱穴は極めて密集していたため建物として認識できたものはなかったが、度重なる建て替えが行われたことが推測される。このように、城下町建造以前の集落（町）の一端を把握できた点は大きな成果といえる。

古代の遺構としては、溝2条を確認した。近年、近世城下町の下層から古代の遺構が散発的に確認され、情報の蓄積がなされつつある（姫路市埋蔵文化財センター 2015・2018）。

〈引用・参考文献〉

今里幾次 1978「播磨国の瓦葺駅家」『古代山陽道の検討』(古代を考える17) 古代を考える会

今里幾次 1995『播磨古瓦の研究』真陽社

大橋康二 1989『肥前陶磁』(考古学ライブラリー55) ニュー・サイエンス社

九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』(九州近世陶磁学会10周年記念)

白神典之 1992「堺摺鉢考」『東洋陶磁』第19号 東洋陶磁学会

瀬戸市 1998『瀬戸市史　陶磁史篇六』

中川　猛 2012「焙烙考―姫路と周辺の焙烙について―」『山口大学考古学論集Ⅱ』（中村友博先生退任記念論文集）中村友博先生退任記念事業会

乗岡　実 2000「備前焼擂鉢の編年について」『第3回中近世備前焼研究会資料（付　第1回・第2回研究会資料)』中近世備前焼研究会

長谷川　眞 2007「播磨の土製煮炊具」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』補遺編 全国シンポジウム『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』実行委員会

姫路市教育委員会 1984『本町遺跡』

姫路市教育委員会 2017『姫路城城下町跡―姫路城跡第338次発掘調査告書―』(姫路市埋蔵文化財センター調査報告第43集)

姫路市教育委員会 2018『姫路城城下町跡―姫路城跡第375次発掘調査告書―』(姫路市埋蔵文化財センター調査報告第62集)

姫路市埋蔵文化財センター 2015『TSUBOHORI2015―姫路市埋蔵文化財調査略報―』

姫路市埋蔵文化財センター 2018『白鷺飛翔―姫路城築城前夜―』(姫路城世界遺産登録25周年記念)

堀田浩之 1988「近世の姫路城」『姫路市史』第14巻 姫路市

山中敏史 1984「本町遺跡の性格について」『本町遺跡』姫路市教育委員会

山本博利・山本和子・今里幾次 2010「播磨国府跡」『姫路市史』第7巻下 姫路市

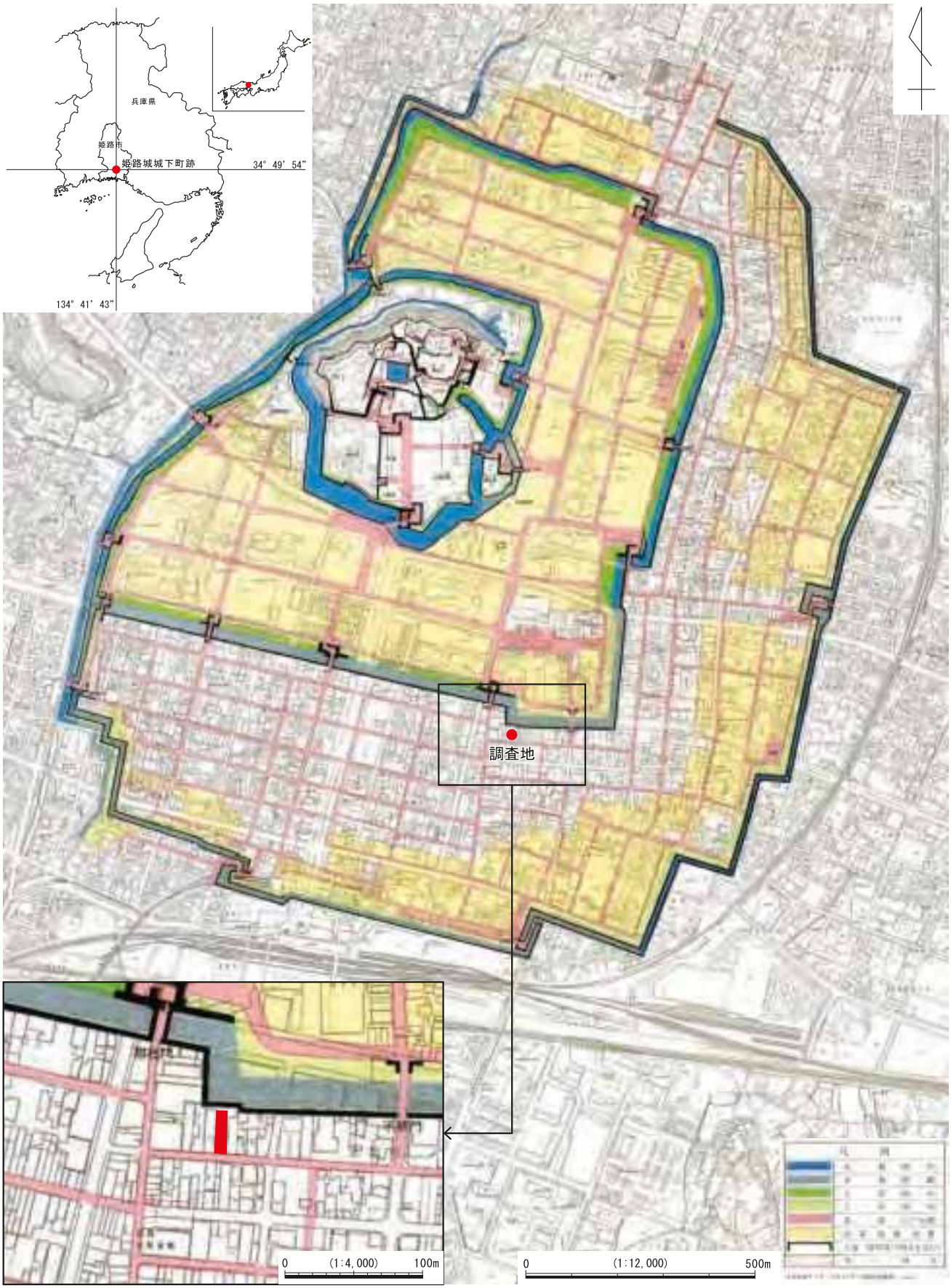


図1　調査地位置図（姫路市2003『姫路城跡（城郭図）』を一部改変・加筆）

図版 2

図2　調査区 平・断面図

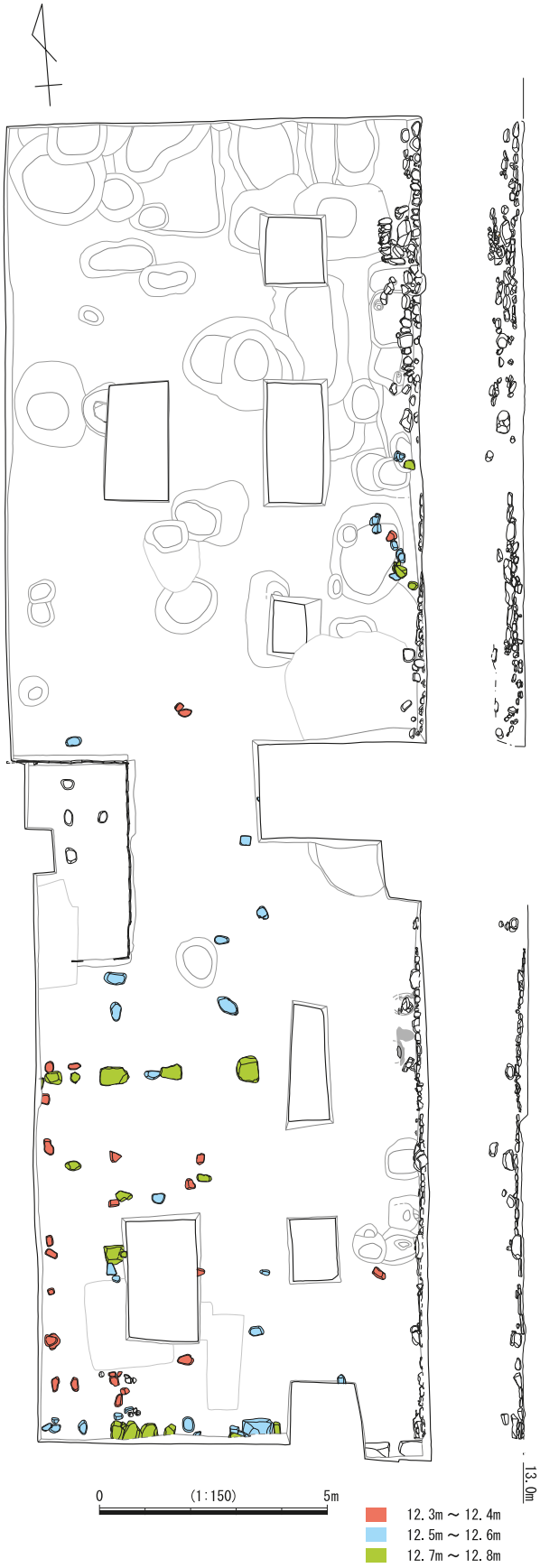


図3　礎石・列石（第1面）

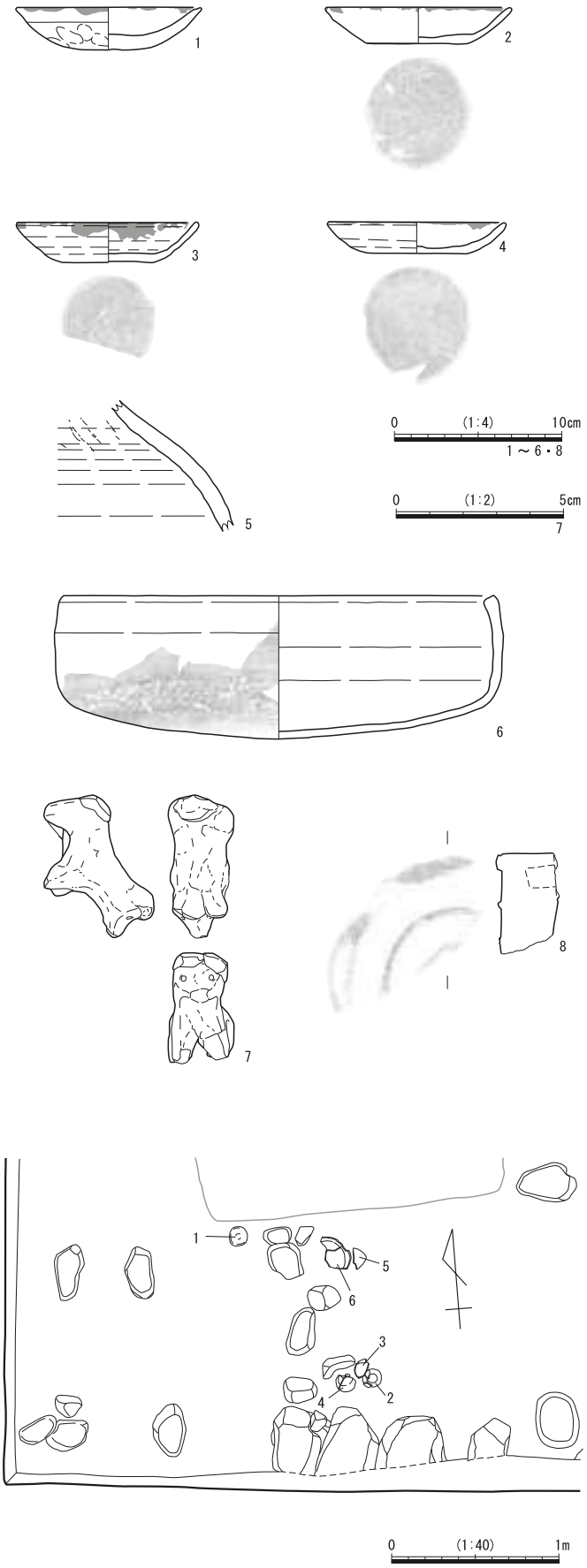
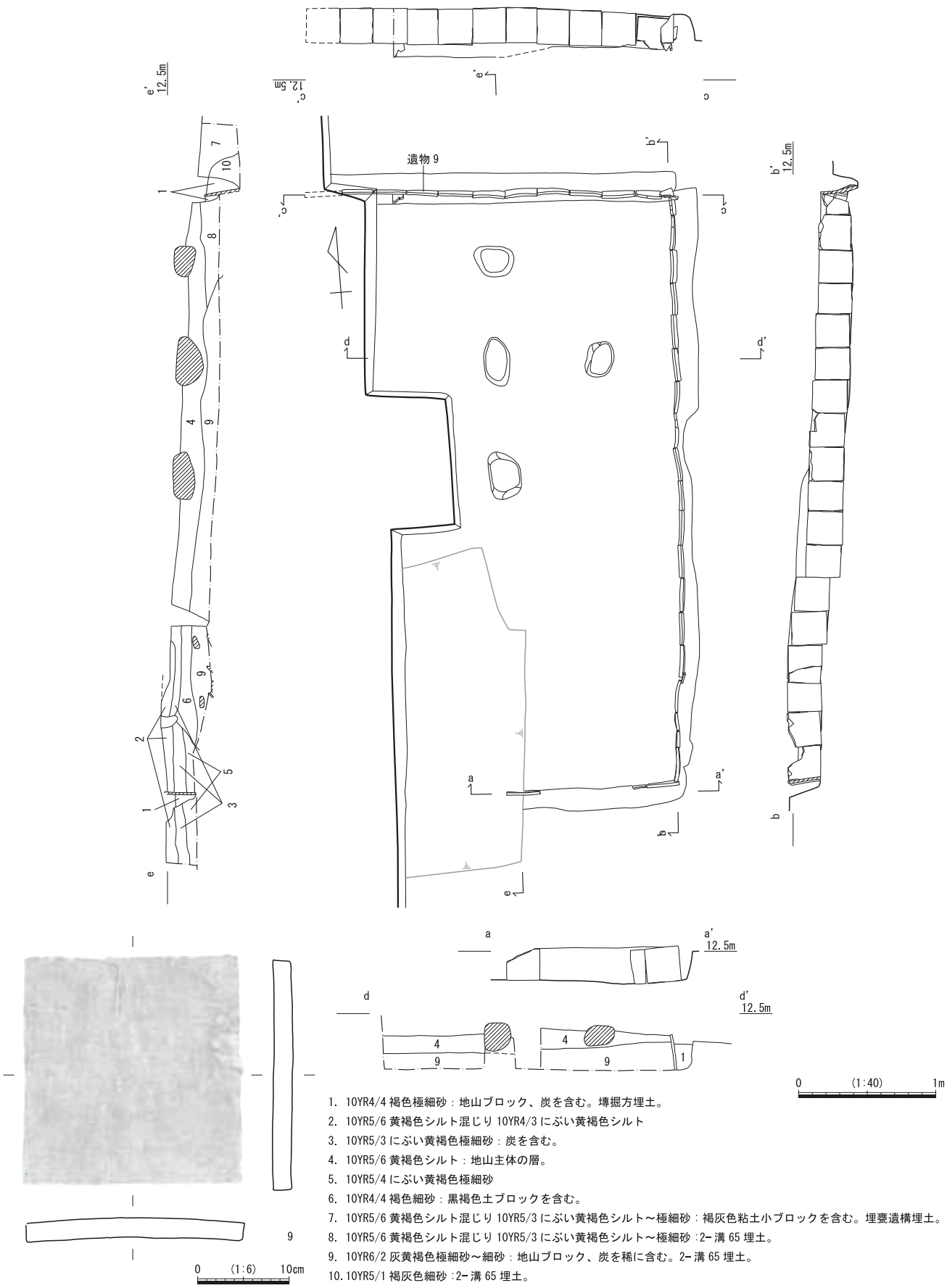
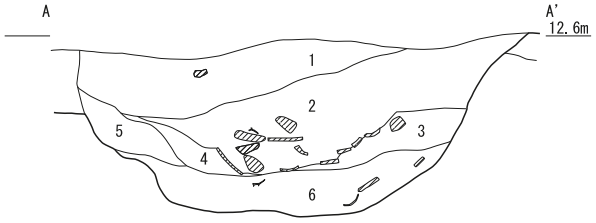


図4　近世整地層出土遺物・出土状況（第1面）



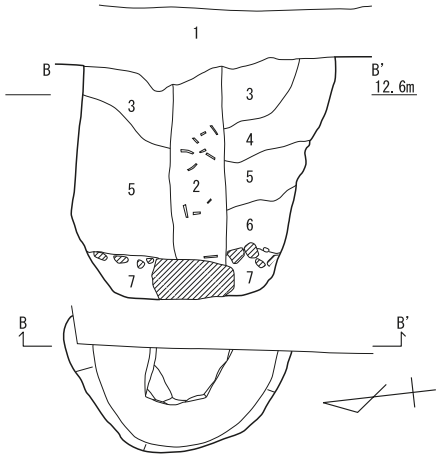
1. 10YR4/4 褐色極細砂：地山ブロック、炭を含む。塼掘方埋土。
2. 10YR5/6 黄褐色シルト混じり 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト
3. 10YR5/3 にぶい黄褐色極細砂：炭を含む。
4. 10YR5/6 黄褐色シルト：地山主体の層。
5. 10YR5/4 にぶい黄褐色極細砂
6. 10YR4/4 褐色細砂：黒褐色土ブロックを含む。
7. 10YR5/6 黄褐色シルト混じり 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト～極細砂：褐灰色粘土小ブロックを含む。埋甕遺構埋土。
8. 10YR5/6 黄褐色シルト混じり 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト～極細砂：2-溝 65 埋土。
9. 10YR6/2 灰黄褐色極細砂～細砂：地山ブロック、炭を稀に含む。2-溝 65 埋土。
10. 10YR5/1 褐灰色細砂：2-溝 65 埋土。

図5　塼列建物（第1面　1-21）



1. 10YR4/2 灰黄褐色細砂
2. 10YR5/2 灰黄褐色細砂：瓦・礫を多く含む。
3. 10YR5/3 にぶい黄褐色細砂
4. 10YR6/1 褐灰色シルト
5. 10YR6/3 灰黄褐色細砂
6. 10YR5/1 褐灰色シルト

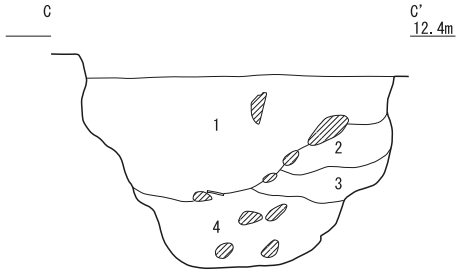
1- 土坑 01



1. 2.5Y5/3 黄褐色細砂：盛土か。
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂：瓦を多く含む。
3. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトブロック混じり 2.5Y4/3 細砂
4. 2.5Y4/3 オリーブ褐色細砂
5. 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂：地山ブロックを含む。
6. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトブロック混じり 2.5Y4/3 オリーブ褐色細砂
7. 10YR4/1 褐灰色シルト：10cm 大の円礫を多く含む。

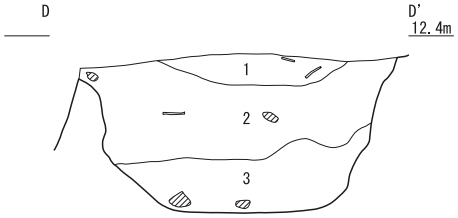
2- 柱穴 16

0 (1:40) 1m



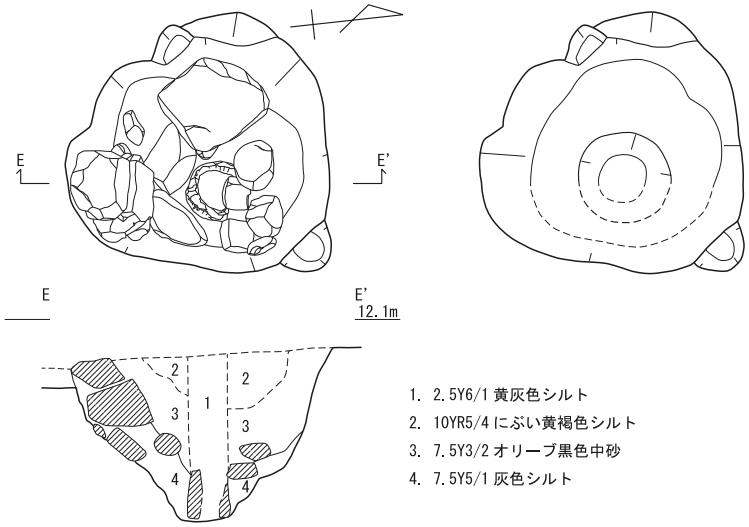
1. 2.5Y5/3 黄褐色細砂：炭を含む。
2. 2.5Y5/3 黄褐色シルト：地山ブロックを含む。
3. 2.5Y5/3 黄褐色シルト
4. 2.5Y4/1 黄灰色シルト：20cm 大の円礫を含む。

1- 土坑 54



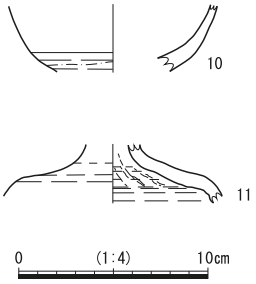
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂：地山ブロックを含む。
2. 2.5Y3/1 黒褐色シルト：炭を多く含む。
3. 2.5Y5/1 黄灰色シルト

1- 土坑 56



1. 2.5Y6/1 黄灰色シルト
2. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト
3. 7.5Y3/2 オリーブ黒色中砂
4. 7.5Y5/1 灰色シルト

2- 柱穴 18



2- 柱穴 18 出土遺物

図6　個別遺構1（第1面・第2面）

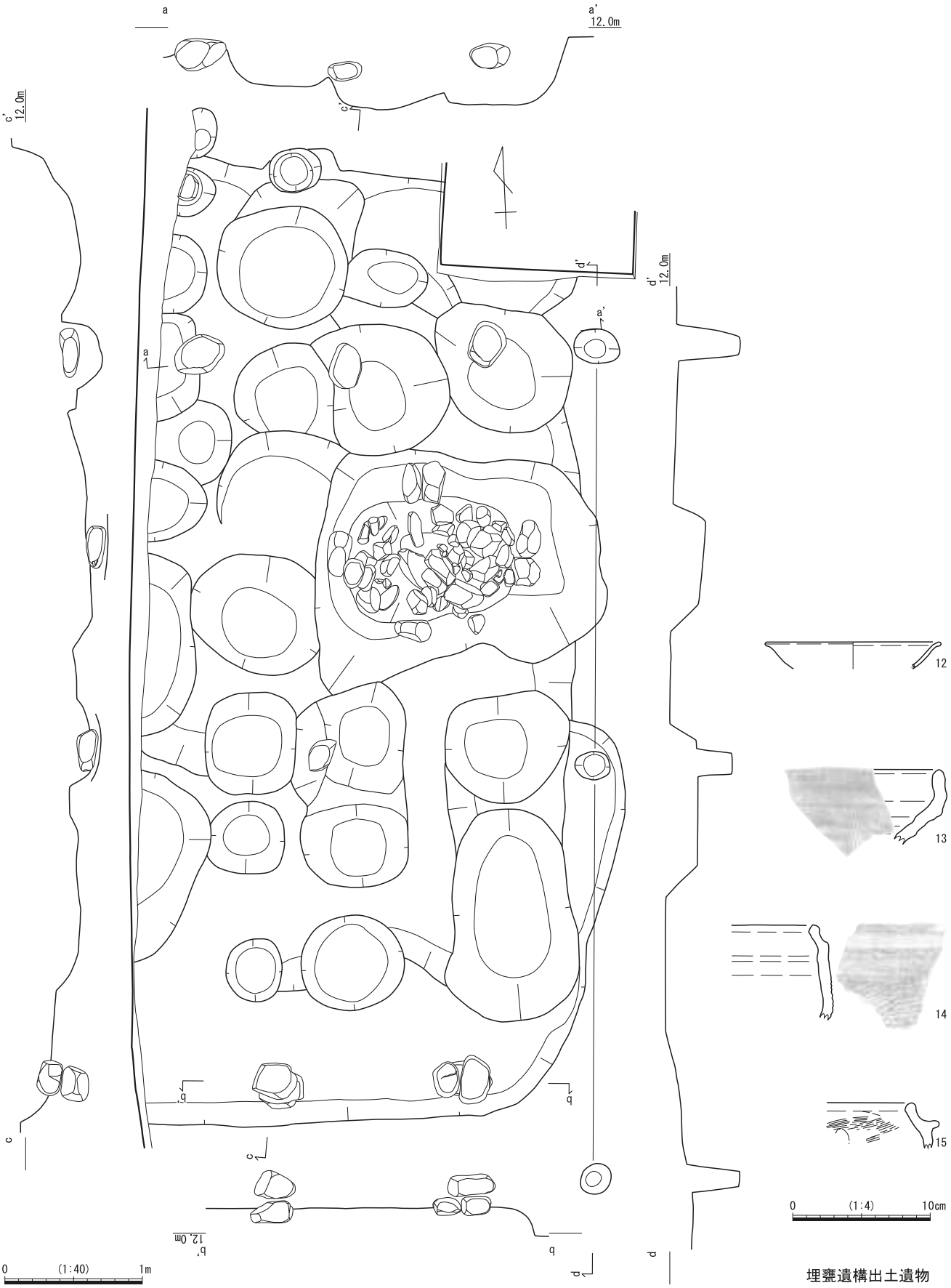
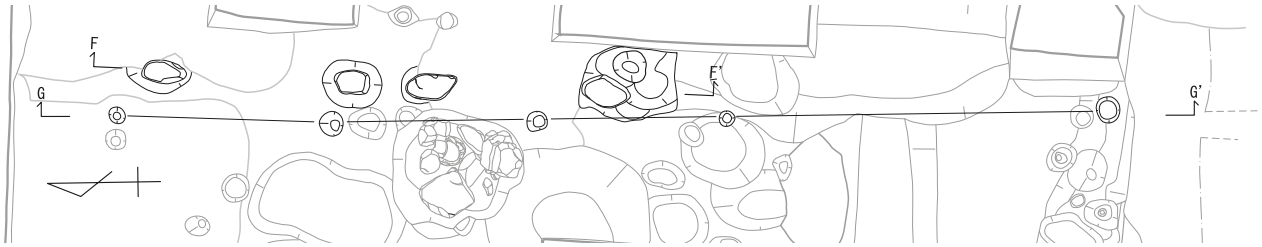
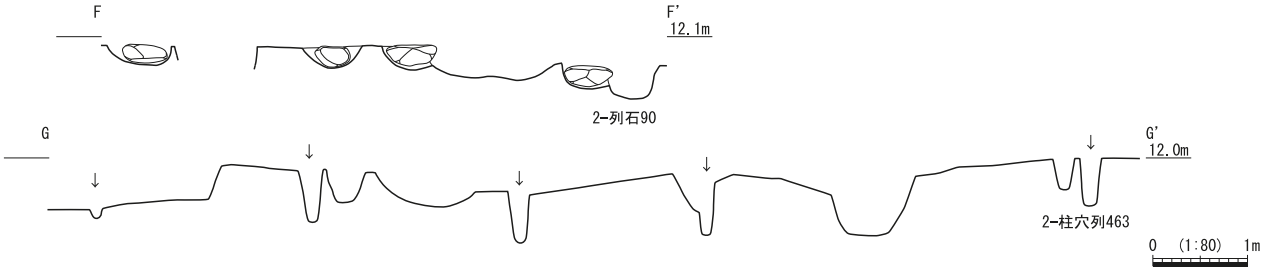
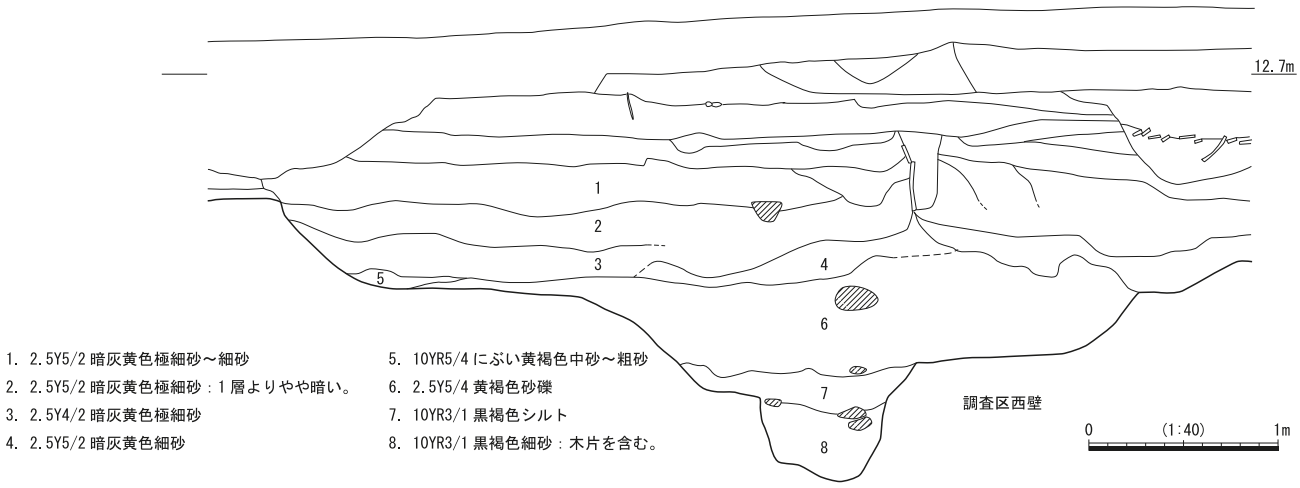


図7　埋甕遺構（第2面　2-31）・2-柱穴列464

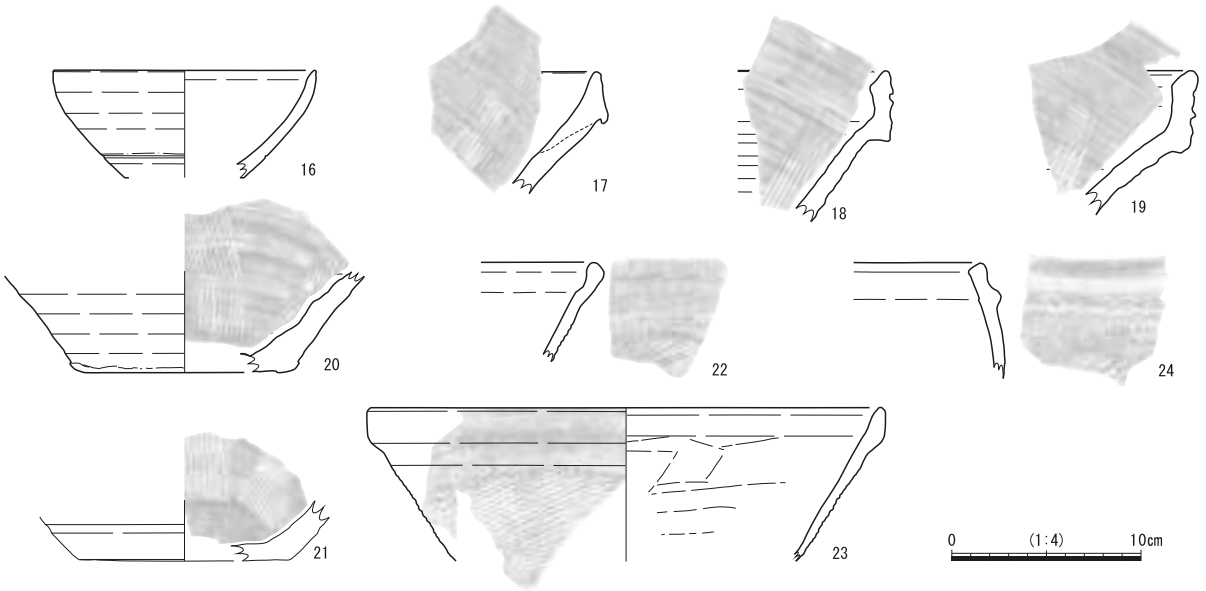




2-列石90・2-柱穴列463

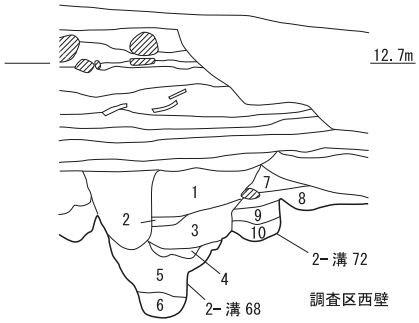


2-溝65



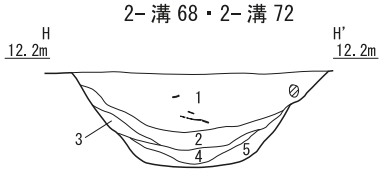
2-溝65出土遺物

図8　個別遺構2（第2面）



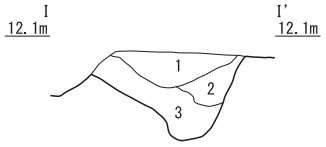
1. 2.5Y6/2 灰黄色細砂
2. 2.5Y7/2 灰黄色中砂
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂
4. 2.5Y7/2 灰黄色中砂
5. 2.5Y5/2 暗灰黄色極細砂
6. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト
7. 10YR7/1 灰白色細砂
8. 10YR6/4 にぶい黄橙色粗砂
9. 10YR7/2 にぶい黄橙色中砂
10. 10YR7/2 にぶい黄橙色細砂

2-溝 68・2-溝 72



1. 10YR4/2 灰黄褐色シルト
2. 10YR3/2 黒褐色シルト
3. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトブロック混じり
   10YR3/2 黒褐色シルト：地山ブロックを多く含む。
4. 10YR4/2 灰黄褐色シルト
5. 3 層と類似

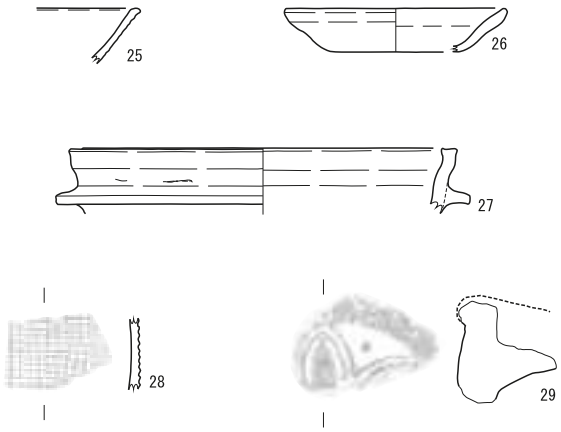
2-溝 66



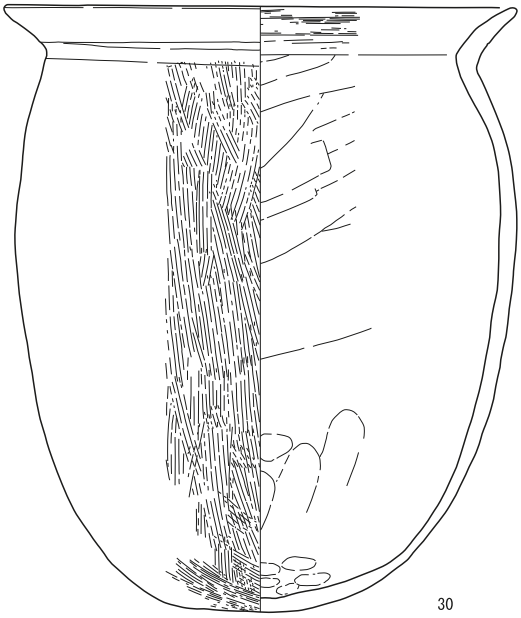
1. 10YR4/2 灰黄褐色シルト
2. 10YR4/1 褐灰色シルト
3. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトブロック混じり
   10YR4/1 褐灰色シルト：地山ブロックを多く含む

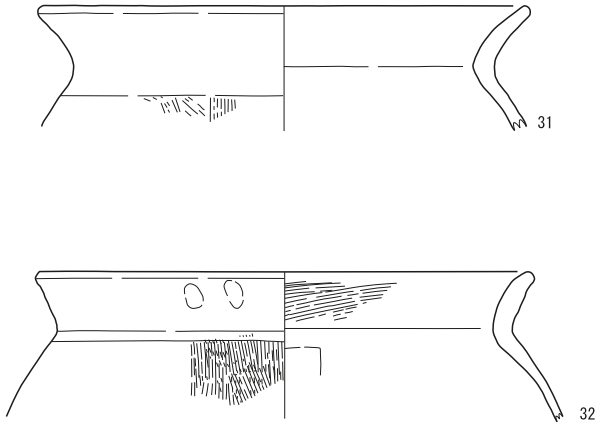
0 (1:40) 1m

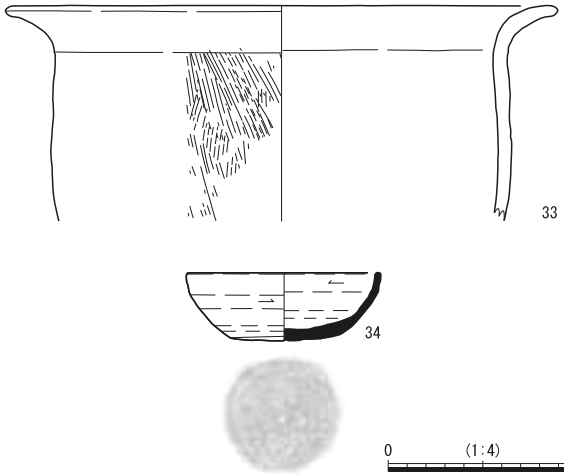
2-溝 76



2-溝 68 出土遺物



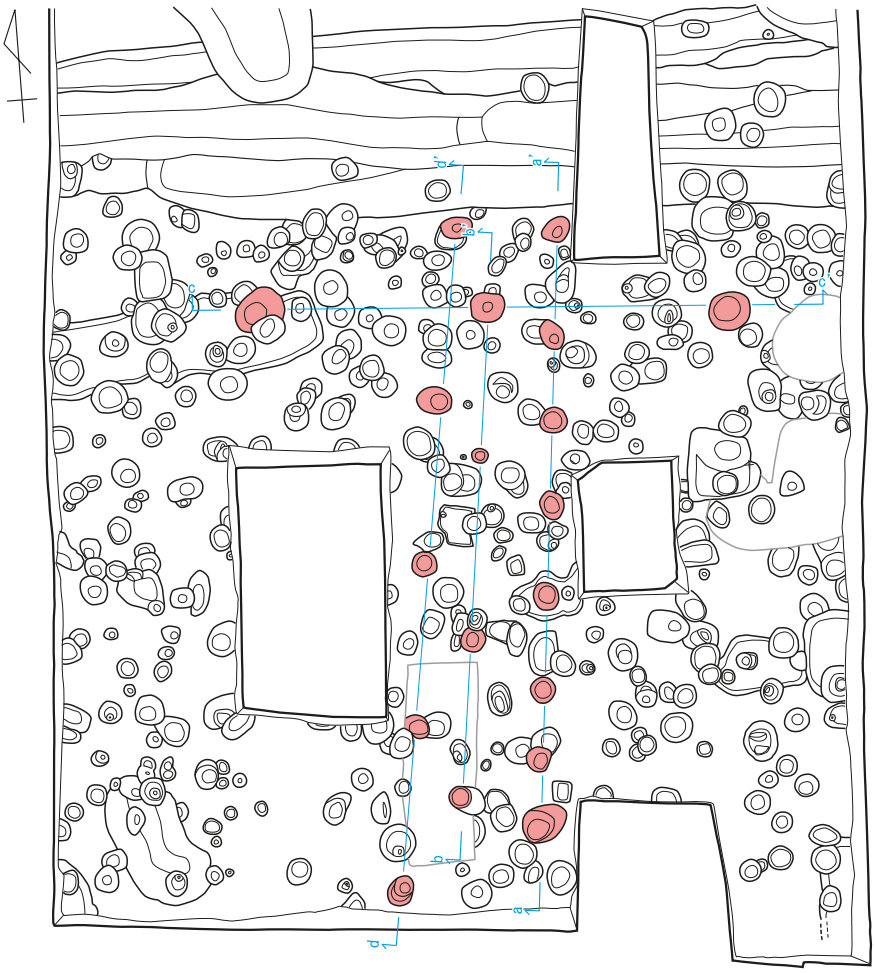




0 (1:4) 10cm

2-溝 66（30～33）・2-溝 72（34）出土遺物

図9　個別遺構3（第2面）



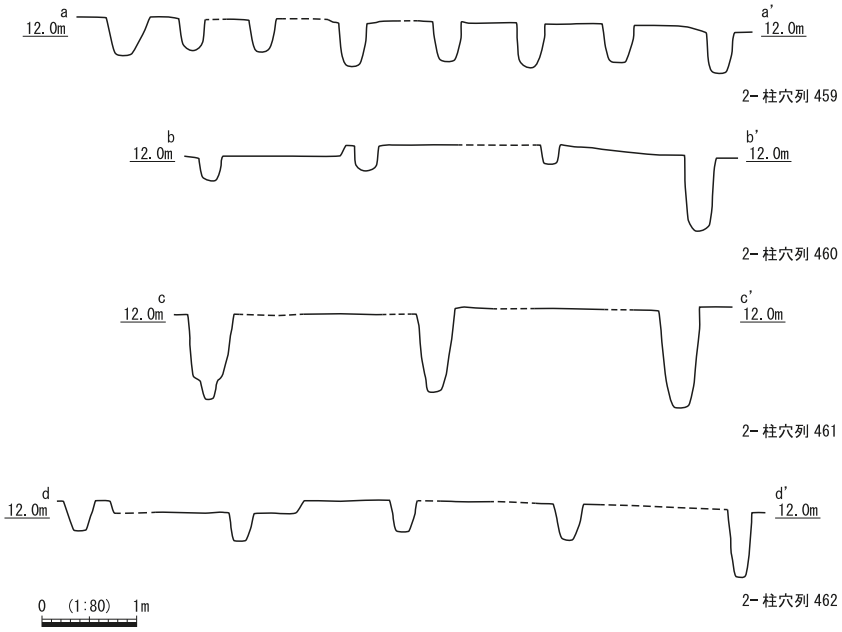


図10　個別遺構4（第2面）

写真図版１

調査区遠景（西から）
南（右）の道路は旧西国街道、北隣接地は中堀

礎石（北から）

列石（西から）

列石（西から）

列石（西から）

塼列建物（東から）

塼列建物土層断面（北東から）

東辺塼列（東から）

北辺塼列（北から）

写真図版 3

第 2 面全景（北から）

埋甕遺構　甕痕跡完掘状況（北から）

埋甕遺構　完掘状況（北から）

2- 柱穴 18（東から）

2- 列石 90（北から）

2- 溝 65（北東から）

2- 溝 68・72（東から）

2- 溝 66（東から）

2- 溝 66　土層断面（東から）

第 2 面南半部（北から）

南壁土層断面（北から）

南壁際漆喰検出状況（北から）

西壁土層断面（北東から）

写真図版 5

1- 土坑 1

1- 土坑 15

1- 土坑 54

1- 土坑 56

2- 溝 66
土師器 甕

2- 溝 68
毘沙門式軒丸瓦

近世整地層
本町式軒丸瓦

近世整地層 犬形土製品

報告書抄録

ふりがな	ひめじじょうじょうかまちあと
書名	姫路城城下町跡
副書名	姫路城跡第422次発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第100集
編著者名	黒田　祐介
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター
所在地	〒671-0246　兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1
発行年月日	令和2年（2020年）3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
姫路城城下町跡（ひめじじょうじょうかまちあと）	元塩町79（もとしおまち）	28201	020169	34°49′54″	134°41′23″	2019.6.5～2019.8.20	220㎡	共同住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
姫路城城下町跡	集落跡	近世	礎石・列石・土坑・柱穴・塼列建物・竈	陶磁器・瓦塼
		中世	埋甕遺構・溝・柱穴列	陶磁器・土師器
		古代	溝	須恵器・土師器・瓦

要約	近世町屋に伴う遺構は良好な保存状態で、多数確認した。遺構の位置により、間口に建物、裏手に廃棄土坑等を伴う空閑地、その間に井戸が配されるという姫路城城下町跡における典型的な町屋の姿を復元できた。また、敷地の中央付近では塼列建物を確認した。 下層からは中世･古代の遺構を検出した。中世の遺構としては、多数の柱穴、溝を確認した。埋土の色調から城下町建造に近い時期のものが多いと推測される。柱穴は密集しており、建物等の建て替えが繰り返し行われたことがわかる。古代の遺構は、溝2条と少ない。

姫路市埋蔵文化財センター調査報告　第100集

姫路城城下町跡

―姫路城跡第422次発掘調査報告書―

令和2年（2020年）3月31日　発行

編　　集　姫路市埋蔵文化財センター
〒671-0246　兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1
TEL(079)252-3950

発　　行　姫路市教育委員会
〒670-8501　兵庫県姫路市安田四丁目1番地

印刷・製本　株式会社デイリー印刷
〒671-0218　兵庫県姫路市飾東町庄57番地2